

風の暦



高橋治

新潮社

〔著者略歴〕

一九二九（昭和四）年、千葉市に生まれる。金沢の第四高等学校を経て東京大学文学部国文学科を卒業。松竹に入社し、一九六〇年より監督作品を発表、並行して戯曲も執筆する。一九六五年松竹を退社、本格的な作家活動に入る。一九八四年、第九〇回直木賞を受賞。主な著書に『派兵』（朝日新聞社）、『絢爛たる影絵』（文藝春秋）、『秘伝』（講談社）、『自白の構図』（文藝春秋）、『風の盆恋歌』（新潮社）などがある。

風の暦
かぜ こよみ

一九八七年二月二五日印刷
一九八七年二月二〇日発行

著者 高橋 治
たかはし ぢ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一—

（編集部） 03—二六六—五四—

振替 東京四—八〇八

印刷 東洋印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 一〇〇〇円



© 1987, Osamu Takahashi
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-356902-6 C0095

風の暦

もくじ

正月の過し方——男の場合 一月 7

白の組曲 二月 25

海草の春 三月 43

旅心憂し 四月 61

若駒の季節にバクチのすすめ 五月 79

梅の日 六月 97

藍と蚊帳と打水について 七月 113

野菜と遊ぶ

八月

131

命燃える日

九月

149

器を選ぶ

十月

167

山の人々

十一月

183

立ち止まるとき

十二月

201

あと書きめいて 自分へのこだわり

219

装画・挿画
村上豊

風の
暦

◆
二月

正月の過し方——男の場合



母を亡くして二年半になる。下総（しもうさ）（千葉県）の生れだから、いわゆる総州女で気性のきつい人だった。手も早いし、口も荒い。わが母ながら、どうしてこう疝性（かんじよう）で、その上几帳面に出来上っているのだらうと、天を仰ぐ思いにさせられたことは数えきれない。

ところが、悍馬（かんば）のような人間ほど折れると脆（もろ）いもので、六十歳を過ぎた頃から、見る見の中に諸事いい加減になってしまった。玄関のたたきまで雑巾（ぞうきん）がけしなれば気のすまなかつた人間が、掃除、洗濯、炊事、なにごととも手の抜き放題になってしまったのである。

その上、時には理解に苦しむようなことまでやり出すようになった。

あれは昭和三十一年だったか二年だったか、仕事で八丈島に行き、すすめられるままに私は二反の黄八丈を買った。先々次第にほんものの黄八丈は作る人がなくなるし、値も高くなる。そう説明されて、先物買い半分、親孝行半分で、母と私のものを買って帰ったのである。

ところが、洗い張りに出すように頼んで、なん年か忘れている中に、私の黄八丈が行方不明になってしまった。母に催促してもとんと要領を得ない。

「そんなものがあつたかねえ」

と、信じられないようなことをいい出す始末なのだ。当時、両親は茅ヶ崎に、私たちは逗子にと、所帯を別にしていたせいもあつて、いつもこの問題は結論が出ずに終つてしまつていた。

しかし、母が病みつき、私たちも茅ヶ崎の家に戻つて、数年して母を送つた。その頃からは殆ど病院暮らしの人だったが、生来の着道楽でなにせ着物の数が多い。もう元氣になつて思うように着られる日が来ないことはわかつていたが、生きている人間のものに手をつけるわけにも行かないので、私は放つておいた。勿論、黄八丈も探さなかつた。

そして、送り出して、初めて整理にかかつたところ、先ず満足な喪服がないことに驚かされた。冠婚葬祭にはうるさい人だつただけに、私は呆氣にとられた。

そればかりではない。濃紺の藍染、というより、お納戸色に近いなんとも素性の知れない布地が一枚分出て来た。しゃりつと張りがあつて、しかも薄手で、紺の色がいかにも映える。

これは儲けものだと思い、私は親しい呉服屋に見せた。

「うーむ」

手にした呉服屋がうなつてしまった。こんなものは見たことがないと首をひねっている。物差をあてて、丈を計っている中に、その手がはたと止つた。

「まさか……」

「なんだい」

私は聞いた。

「旦那さん、これ」

布の端をつまんで、呉服屋が私に見せた。染まりきらない部分がほんの僅かだが残っている。眼をこらして見ると、黄色い。

「あ」

思わず私は声を上げそうになった。私の行方不明の黄八丈だったのだ。

母が一体なにを考えてお納戸色の黄八丈をこしらえてくれたのか、私にはいまだに理解が出来ない。大体、少しでも着物のことを知っている人間なら、黄八丈に他の色をかけようなどとは思わないだろう。着古して、洗いざらしにしても、独特の糸染めの味を保つのが黄八丈なのである。

余談だが、たったひとつ、或いはと思える理由がないでもない。

それは私の着方の問題なのだ。七五三五分増しといって、女ものの仕立て方を利用し一見して、粋いきで、その分かたぎとは見えない着物の仕立て方がある。細身に見せる方法だから、体が締いまっていくには似合わない。私は生意気盛りの上痩せていたせいもある。問題の黄八丈をその仕立て方でしかも単衣ひとえで着ていた。

「バクチ打ちみたいな恰好して」

母は私が黄八丈を着る度に眉まゆをけわしくした。大体、男が黄八丈を着ることが既に気に入らない。その上、映画などというやくざな世界に入ったから、そんな渡世人まがいの恰

好をするんだといわんばかりの顔であった。

着物の素性を変えて、ぐつと地味なものにしてしまえば、息子もまともな着方をするだろうと考えたのだろうか。それ以外に思い当ることはない。

濃紺の布地を見てしめた、儲けたと思つたくせに、人間は現金なもので、自腹を切つた黄八丈だとわかつた途端に、私はムラムラとした。染物屋の看板を上げている以上、黄八丈を染めて良いものかどうかどうかわかりそうなものじゃないかと考えたのである。もう五十歳をこえていたが、もともと遊び着しか着ない人間だから、鮮やかな色合いの黄八丈を思い出して、駿馬しゅんばがロバに成り下つたのを見るような気がして、それも腹を立てる原因になつた。

「そんなことはお止めになつた方がよろしいです。勿体ない上に、頼まれた当方も全く自信がありませんと、なん度もお断りしたのですが、奥様がどうしてもおっしゃつてお聞き届けになりません。いや、それに、あれに藍をかけるというのは本当に苦勞致しました」

染物屋の主人は一件をきちんと覚えていたばかりでなく、こちらが辟易へきえきするほど丁寧な挨拶で、氣負いこんだ勢いもどこへやら、思つた十分の一の文句もいえずに私は電話を切つた。

そんな、考えられないことをするようになった母だったが、氣力と体力の続く限り手を抜かなかつたのが、お節料理せちだつた。

といつて、たいしたことをするわけではない。どこの家でも用意する種類で、三段重ね

の重箱をふた組一杯にする程度の料理なのだが、母の場合、疳性なだけに、一品一品に手間がかかった。てりゴマメはこうでなくてはならない。栗きんとんを作るには、ここで手抜きをしてはいけないという独特の美意識と戒律があつて、そんな自分に課したものをみたすために、精力を傾け尽すという感じがあつた。正月に私の家に集つて来る近しい家族の中心だとの自意識もあつたのだろう。

といつても、私の家はどうというほどの家柄ではない。

昔、水戸路あるいは水戸街道と呼ばれた道が、土浦にさしかかる手前で、霞ヶ浦に流れこんでいる桜川という川を渡る。その手前に下高津という小さな集落があつて、道の両側にほんのひと並びの家々が軒を連ねていた。そんないわば町外れで雜貨を扱っていたのが、私の父の生れた家である。

私がもの心ついた頃にも、屋敷の裏木戸をあけると、遠くに見える筑波山まで一望の青田がひろがつていたのだから、父の育つた頃はさぞうら淋しい場所だったのではないかと
思う。

あれはどんな加減になつていたのか、町並みを抜ける街道は、川に向つて下るのではなく、坂になつて堤防へ上つていた。そういう地形だから、桜川から引かれた用水は、軒下をかかなりな急流になつて流れていることになる。少々の洗ひものなら、軒下にしゃがんでその用水ですましてしまつていたようだ。

多分、父はそんな土地で商いかたがた僅かばかりの田畑を耕して生きることが嫌だったのではないだろうか。小学校を卒業すると、高小卒と誤魔化して国鉄に就職してしまう。

茨城の人間がどうして千葉で勤めることになったのか、その辺のことはとうとうくわしく聞かずじまいになってしまったが、私が生れた頃は父は土浦を離れて千葉に根を下していた。

その父は長男なのである。長男が先例を作れば、弟たちが真似るのは無理もないことで、次男は船員、三男、四男も国鉄に入って勤務地は千葉、なんのことはない。四人もいた息子が一人も家業を継がず、みんな家を出てしまった。男の子四人きりで、娘は一人もいなかったのだから、両親祖父母を土浦にほうり出して来た形になる。

誰もはっきりと教えてはくれないのだが、父はどうも私の祖父と家を出る前後にいさかいがあつたらしい。父は進学を望み、祖父は教育に関して全く理解を持たない。そんなことが原因を作っていたと、父がぼつとりともらしたことがある。

「機関車の罐かまをたかしたら、俺の右に出る者はいなかった」

父はよくそう自慢したし、幼い頃からなん度となく聞かされたので、私も信じこんでいたのだが、どうやらその話は嘘だったらしい。昭和八年、三十三歳で父は佐倉の機関区の助役を命ぜられる。その若さでその地位についた人間が、罐たきをそう長いことやれる道理がない。で、父が死ぬ少し前に聞いてみた。

「機関車には何年ぐらい乗ったんです」